

8 黒島流れ

わたしは、一学期の終わりに、「枕崎少年の船」に乗ることにしました。鹿児島郡三島村の黒島に行って地元の人たちと交流をします。枕崎市から船で二時間ぐらいのところですが、船はけっこうゆれて、気分が悪くなる人もいました。

黒島のおき合いで船は止まり、いれい祭（なくなった人においのりをささげること）が始まりました。今から約百年前、この場所がかつお船が台風のためにそうなんし、たくさんの人（四百十一名）が命を失ったそうです。わたしたちは、船から花束を海へ投げ、おいのりをしました。わたしは、たん当の先生にその時の話をくわしく聞いてみることにしました。

そのころのかつお船は、まだ小型の帆船（帆をはって風力で進む船）でした。また、今の大型漁船のように台風の進路を知るための通信せつびもありません。その日も、空の様子や風の向きをうかがいながら漁に出たのです。つまり、長年のかんにたよっていたのです。ですから台風が近づいていることに気づいたときには、ひなんするゆとりもなく、そうなんをかくごしなければならなかったのです。



次の朝はきのうとうってかわって静かです。
うなんした人々のかげが小さく見えます。

「さあ、急いで助けに行こう。」

村の若者たちが、それぞれにひもやなわなど救助のための道具を持って岩場におりていきました。
岩場まではだんがいぜつべきで、おりるだけでも大変なところを、けがをして歩けない人や今にも死にそうな人を背負^{せお}って、ようやく家まで連れて帰りました。

海はうねり、海岸の岩にくだける波は七、八メートルにもなり、北東の風はますます強くなり、帆船の集団は島かげへとひなんしました。しかし、しだいに強くなる風雨に、今度は船を岩場にたたきつけられないように、必死におきへと向かいます。すると、みるみるうちに船は波にのまれ、岩場にたたきつけられてしまいました。この様子を島から見えていた人々は、どうすることもできず、ただただ台風が通りすぎるのを待つばかりでした。向こうの岩場にはこわれた船が打ち上げられ、そ



村では区長くちょうの指示しじにしたがって、手分けしてけがをしている人の世話をしました。また、亡なくなっ
てしまった人は、手厚くほうむりました。けがの手
当にはお年寄りから聞いた薬草などを使いました。
着物や食事の世話は、みんなで協力し合って行いま
した。昔から島には田んぼや畑が少なく、土地はや
せていてあまり米がとれないところでした。だから、
ふだんは、からいもや麦、あわなどを食べていまし
た。米は、お正月やお祭りの日に少しだけたいて祝
い、残りを非常時ひじょうじのためにたくわえていました。
これを「養生米ようじょうまい」と言って、かねてから大切にし
ていました。村に重病人かんびょうがでたときには、その養生
米を出し合い看病かんびょうしていたのです。村の人々は、
このたいへん貴重きちような養生米を出し合って、枕崎か
ら助けの船が来るまでの間、けがをした人の世話を

したのでした。

こうして、けがをした人たち三十名あまりは、すっかり元気をとりもどし、枕崎に帰ることができました。枕崎の人々は、黒島の人々に心から感謝しました。それから百年余り、枕崎と黒島の人々の親交しんこうが続けられ、今では、この「枕崎少年の船」や中学生の自然教室など様々な交流が進められているのです。

お話を聞いているうちに黒島の港が見えてきました。たくさんの方が出むかえています。わたしは何だか、これから始まる交流がとても楽しみです。